

# 日本人チューター学生の異文化接触体験： ソーシャル・サポートとソーシャル・スキルおよび自己の成長を中心に

田 中 共 子

## 要 約

留学生のチューターを体験した日本人学生に対する面接調査を行った。主たる目的は、異文化接触体験を通じての成長を把握し、実際の活動に含まれたサポートの授受を調べ、また必要と思われるソーシャル・スキルについて整理することである。このことには異文化間心理学の調査対象としてとらえた場合、予備調査的意義がある。また国際性を高めたい希望や、留学生とのトラブルを持って来談する学生来談者に、学生相談として応じる際の指導指針を提供する資料ともなる。最後に結果を発展的にとらえ、学生生活における外国人留学生との接触の意義を教育的視点から検討し、学生チューター制度の運用上の示唆を得る。

## <目 的>

チューター学生とは、国立大学において新渡日留学生にわりあてられる日本人の学生で、生活の開始や学習の手助けといった役割を担っている。実際のところは、到着時の出迎え、学内や地域生活の補助、付近の案内、簡単な通訳、日本についての質問に関わる助言、話し相手などが期待されている。多くの場合、教官の依頼や本人の希望によって任命される。期間は半年または1年を単位とし、普通は薄謝が支払われる。留学生のカテゴリーによっては、ボランティアで運用する場合もある。

本稿はチューター学生の異文化接触体験について、その実態と意義を調査したものである。その理由はいくつかある。このシステムは、留学生の援助のみならず、日本人学生側にとっても貴重な異文化体験の機会と思われる。この制度が留学生の便宜のためにのみ運用されるのではなく、双方のための学習機会として生かされることには教育的な意義がある。そしてトラブルが生じた場合に相談先となる学生相談にとっては、指導上の指針を得るものでもある。

また異文化接触が個人にもたらす成長発達の意義を把握しておくことは、青年期を過ごす大学での生活が、いかに国際性を向上させる機会となりうるかという可能性への指針となる。筆者の関与する学生相談には、国際化への関心はあるが機会や勇気がない、方法が分からないといった日本人学生の相談が寄せられる。本稿の知見は、彼らへの助言の視座となろう。

異文化接触にともなう葛藤とその克服といった心理的動態、ソーシャル・サポートの授受、必要なソーシャル・スキルの気づき、およびその獲得ニーズは、ホスト側からみた異文化接触現象の心理学的研究主題として、たいへん興味深い。チューター・システムは、こうした研究対象となる事象が、包括的な形で内包されている現象である。リサーチ・クエスチョンの萌芽として、この現象群を、現実に近い形で整理し、先のリサーチへと発展させる予備調査的な整理を行いたい。

サポートの側面から見ると、留学生の受けるソーシャル・サポートは、日本人からのものがほとんど機能していないという(ヒックス、1992)。スキルの側面への示唆としては、日本人学生は、留学生と交流してみたい希望はあるが、自分から積極的に踏み出すことには躊躇があり、その要領もよく分からないという指摘がある。(高井・田中、1993)。これは質問紙調査であり、留学生への一般的な関心についての調査結果である。今回は個々のケースを対象とした面接調査を行い詳しく現象を調べた。総じて機能していないといわれるチューターシステムだが、意義深い交流を行った例は認められないのか。あるいは、ためらいがちといわれる日本人学生は、チューター経験を全く生かせていないのか。被験者の内省報告から知見を整理する方法で、少数例であっても意義の高い異文化接触をした者が認められれば、そこから成功の要因を学ぶこともできよう。

研究上の意義としてはもう一つ、留学生側に対するサポートやスキルの調査はある程度行われてきた反面、ホスト側の資料が不足がちであることも指摘できる。交流が双方向性のものである以上、ホスト側の研究が必要であることはいうまでもない。本調査結果は、ホスト側研究における、これらについての知見を補うものである。

最後に、この制度が十分に活用されているかどうかを検討することから、システム面での進展、組織としての対応にも、有益な知見を提供することと期待される。

以上のように本調査では、制度運用面のチェックや教育的な見地からの質問も交えてあるが、主たる目的は、現象を現実に近い形でとらえておき、日本人チューター学生を対象として、以下の手がかりを得ることである。

1. 留学生に対して、どのようなサポートを与えていたか、また、受けていたか。サポートの授受から、この対人関係の質的側面を評価する。またつきあいの頻度から、量的側面を評価する。こうして留学生の持つネットワークの中の、チューターとのつながりという部分に関して、対人関係の質と量の両面を把握する。
2. 留学生との、コミュニケーション上の障害とそれを克服する工夫は何か。この知見から、異文化接触にともなうホスト側のソーシャル・スキルのニーズを検討する。
3. チューター本人にとっての、体験を通しての異文化接触の意味は何か。本人の成長にもたらした意義を知る。これを学生相談上の指導に役立てる知見として整理する。

## <方 法>

調査対象者：さる大規模国立大学で、1990年代前半に有償のチューターを経験した13人の大学院生。男性5、女性8。担当した留学生は、東アジア、南・東南アジア、西欧、北米、中南米、中東、アフリカなど広範囲にわたる。留学生は、全て本国で学部レベルの教育を終えてから来日している。

方法：半構造的面接。あらかじめ質問項目を書いた紙を渡し、それに即して対話で質問に答えていく。面接者はメモを取りながら聞いた。お礼に小さな文具を渡した。面接時間は1人約1時間。

質問紙：被験者の体験を尋ねながら、そこからサポートやコミュニケーションの取りかた、本人の成長を軌跡を、引き出していった。質問項目は、Yashima (1991) が在米日本人留学生のサポートと適応状態を調べたときの質問項目を参考に設定した。主に、ポジティブな体験、ネガティブな体験、つきあいかたの頻度と質(サポートの授受)、コミュニケーションの困難と工夫、要スキル領域の特定。なお特定させたサポートの種類は、Tanakaら(1994)を参考に設定した。さらに自由な感想を述べる項目をつけ加えたが、これは、十分まとまらなかつたり、はっきりとは意識されていないような気づきや意見を、十分述べられるようにするためである。項目を全てあげると、以下の通り。

表題／「チューターを経験した感想と意見」

- 1、チューターになって最も良い思い出、一番良かったできごとは何でしょうか。
- 2、一番苦勞したこと、大変だったこと、困ったできごとは何でしょうか。
- 3、留学生と、どんなことを一緒にしましたか。
- 4、留学生と、どれくらい会っていますか。
- 5、留学生に対して、どんなサポートをしましたか（日本語、日本文化、勉強、相談、レジャー、物・金、情報）。
- 6、留学生からは、どんなことをしてもらいましたか。
- 7、チューターをして、勉強になったこと、得たものは何でしょうか。
- 8、留学生とのつきあいにおいて、心がけていることや、工夫していることはありますか。
- 9、留学生とつきあう上で難しかったこと、やりにくかったこと、問題だったこと、誤解が生じたことなどをあげてください。
- 10、考え方や習慣の違い、やり方の違いなどを感じたことはありますか。それはどんなときですか。
- 11、チューター制度をよくする提言をどうぞ。
- 12、次にチューターになる人へ、何かアドバイスをどうぞ。

調査時期：チューターを4～5カ月経験した時点。

結果の整理：単項目にカード化し、類似のものをまとめながら内容を整理した。なお、調査対象者および担当した留学生の特定を避けるため、記述には多少の変更を加えてある。

## < 結 果 >

### 1. もっともよかったできごと、よい思い出

- ①食事：特に国の料理をふるまわれること。
- ②パーティー：英語を使ったこと。ビールを飲んだこと。音楽を聞いたこと。冗談を言いあったこと。友達の友達が合流してもりあがること。
- ③外出：レジャー。教会へ行く。
- ④友人・ネットワーク：いい友達になれたこと。自分の方が相談に乗ってもらったこと。留学生の友人を含めた友達の輪に入れたこと。彼らを通じて、いろいろつながりができたこと。
- ⑤言葉：日本語を教えたこと。
- ⑥世話：相談に乗ってあげられたこと。始めからじっくり世話ができたこと。情報探しなど、努力がうまく行き感謝されたこと（安い店を探すなど）。
- ⑦現実を知る：外国人の置かれている状況を理解した（不動産探しの難さなど）。受け入れや手続きの仕方が分かり、興味深かった。
- ⑧国の話：国の話が聞ける。
- ⑨視野の広がり：いろいろな考え方に会った。日本について、驚くような質問をされる（仏教と神道のことなど）。
- ⑩人物：人間ができています。大人だ。いろんなことを考えている。
- ⑪趣味：趣味の活動を通じて一体感を得た。自然なつながりができた。

### 2. いちばん苦労したこと、大変だったこと、困ったこと

- ①時間：授業やバイトをぬっての時間のやりくり。
- ②連絡・会合：ゆっくり会える場所がない。交通が不便。友達に車を頼まないと動けない。留学生は交通不案内のため、待ち合わせができない。3～4人の留学生を集めて引率するのはひと苦労。最初は電話がないので、連絡が不自由。チューター同士や留学生間でも連絡が徹底しにくい。学内施設に仮滞在して住まいを探す人がおり、その施設の使い方や規則が不明で困った。寮は日曜日は話が伝わりにくい。漢字が読めずに別のバスに乗った人がいた。
- ③言葉：言葉が通じない。英語ができない。英語以外の言語ができない。日本語がうまくない。言葉の障害による行き違い。コミュニケーションをあきらめがちになる。言葉の通じる留学生同士で物事を片づけてしまう。理解できないと自分の解釈で物事をやりだす。怪訝そうな顔をされて、始めて何か変だと気がついた。さる国の人には心を

開かず、その言語ができる人を頼っており、自分が聞いても大丈夫と言うばかりだった。

- ④システム：学内施設の使用要領が分からない。銀行や市役所のシステムの説明が難しい（暗唱番号など）。しくみの違いを理解させるのが困難。
- ⑤様子が分からない：何を知りたいのか分からない。来たばかりの人の状態が分からない（買い物の必要など）。
- ⑥お金：留学生のほうがお金持ちで、消費レベルについていけない。
- ⑦依頼：できることとできないことがある（バイトの紹介、中古品探し、条件の難しい家探し、保証人、自分も知らない交通機関の情報など）。
- ⑧依存：寂しいといって始終電話された。暇だから会いたいと頻繁に言われた。
- ⑨人数負担：呼ばない留学生までついてきた。他のチューターの担当の学生なのに、自分をあてにしてきた。初期には特にだが、1人で3人を担当したのは多すぎた。
- ⑩留学生の無力さ：最初は何もかも教えるので大変。心配なことが多い。自分で生活できるようにするまでが大変（傘がなくて外出できないが食べ物がない、と留守番電話に入っていたので、友達に車で行ってもらったなど）。授業が分からずいろいろ聞く。
- ⑪情報：学内施設の非常事態のマニュアルはどうなっているのか。不動産やホテルのリストが欲しい。
- ⑫人間性：お礼を言わずに注文ばかりの人がいる。同国人で固まる。

### 3. 一緒にしたこと

- ①飲食：食事に呼ぶ・呼ばれる。食事を一緒に作る。料理を持ち寄る。外食に行く。酒を飲む。
- ②レジャー：ハイキング。コンサート。祭。ボーリング。カラオケ。教会に行くこと。合唱。野球観戦。観光旅行。誕生パーティー。さよならパーティー、他各種パーティー
- ③通訳：代理で電話。手紙の翻訳。窓口での通訳。
- ④外国語：単語を教わる。外国語を教えてもらう。
- ⑤日本語：日本語を教える。日本語会話の練習台になる。時間を設定して日本語会話のレッスンをしてあげる。ことばを直してあげる。
- ⑥手伝い：手続きの手助け。買い物の付き添い。地理と行き方を教えておき、慣れたら一人で行かせる。一緒に自転車で周囲を回って案内した。引っ越しの手伝い。病院付き添い。診療関係の書類書きの手伝い。
- ⑦質問：つきあう相手との関係の相談。日本の習慣について聞かれた。始めのころのいろいろな相談にこたえた。
- ⑧仲介：先生とのトラブルの間に立つ。
- ⑨話し相手：いろいろな人と話すチャンスが増えた。海外のニュースについて一緒に話した。会って挨拶やいろいろな話をした。

⑩交流：家族で来た人の子供と仲良くなった。

#### 4. どのくらい会っているか

①最初は密：来日直後はしばらく一緒にいた。最初2～3週は、週1回は連絡していた。来日当初1カ月は、週3～4回。

②後は粗：学校で顔が会うだけ。自分は忙しいのであまり会わない。留学生同士で情報交換しているので、しゃしゃり出ない。おちついたら留学生同士でやっているの、会う必要なし。手続きが終われば特に会うこともない。2～3週の後、生協で会えば話をする程度。その後一度、一緒に食事をしただけ。

③定期的：週1回は会う。週2回くらい会っている。週1回趣味の集まりで一緒。1週間に1回か、少なくとも2週間に1回。月1～2回会う人もいる。週に2～3回は誰かに用事があって留学生の寮に来るので、そのときに他の人にも会う。チューターの仕事以外にも連絡や約束があって、留学生には会っている。さる国の人たちと前からつきあいがあったので、いろいろ会う機会がある。約束で会うほか、偶然お昼を一緒にすることが多い。趣味の活動でよく会っている。

#### 5. どんなサポートをしたか（サポート分類別の例）

<日本語>日本語で話すようにして練習させる。会話を直す。教えはしないが次第に日本語で話すようにする。週2～3回会って、日本語と外国語の交換教授をしている。

<日本文化>日本の文化や慣習についての些細な質問に答える。この地域について説明する。地域の歴史的な意味や戦争についての話。日本文化を本で説明する。

<勉強>専門の話をする。論文を直してあげる。

<相談>プライベートなことなど、いろいろな相談にのる。バイクの購入や手続きについて相談された。

<レジャー>観光地やコンサートに行く。スポーツをする。一緒に遊ぶ。テープを貸してあげる。レジャーにつきあう。

<物・金>故郷のおみやげを分けてあげる。他の援助は全てしたが、物や金の援助はしていない。

<情報>日本の制度に関する質問。お金の払い込み方。バスの乗り方。買い物の仕方。中古の自転車屋の所在。壊れた自転車の捨えるところ。バザーの情報。ほか聞かれたことについての情報をあげる。

<その他・「実働」に関わるもの>手続きを一緒にやる。バザーの購入品を運ぶ手伝い。買い物につきあう。警察につきそって一緒に事故処理。学校に子どもを入れる手続きに行った。中古の自転車を求めて店を車でまわってあげた。日本人に電話する手助けをした。引っ越しの準備をしてあげた。

#### 6. 留学生からしてもらったこと

①外国語：英語の練習の機会になった。英語で話した。母国語を教わった。

- ②文化情報：その国の話や情報を聞いた。外国文化の話をしてくれた。その国の日本語教育の現状について聞いた。宗教・食事の仕方などについて教えてもらった。テレビでは分からないその国のことがわかった。本当はどんなことを考えているのかとか、国民性・民族性について知った。国の式典のデモンストレーションを見せてくれた。
- ③料理：珍しい料理に呼ばれた。国の料理を食べさせてもらった。遅くなったのでといって、ご飯をおごってくれた。変わった酒を飲まされた。奥さんの手料理をふるまわれた。食料品の買い物の仕方などを含めて、その国の料理文化を実感させてもらった。
- ④みやげ：国のみやげをもらった。
- ⑤協力：自分の実験に被験者として協力してくれた。
- ⑥相談：自分の方が相談にのってもらった。
- ⑦なし：特になし。

## 8. 留学生とのつきあいで、心がけていることや工夫していること

- ①異文化性への配慮：その文化で禁止になっていることをしないかどうか気にする。自分の習慣が通じないことがあるので、反応に注意している。その人の部屋ではその国の習慣に合わせる。遠慮をしない人たちなので、自分もしないで気が楽。その国のことを少しでも知っているとスムーズに話が進むし、向こうも喜ぶ（年号や言葉など）。
- ②距離感：踏み込みすぎない。引っ張りすぎない。やってあげてはだめで、自分にできることはやらせる。どうしてもできないことならやってあげる。何か言ってきたら対応するように待機する。助けてくれと言ってきたら極力手伝う。本当に困ったことなら夜中でも駆けつけた。勧めがお節介に受け取られることがある。寡黙な人なので、積極的なことを控えた。相手が異性ならプライベートな会い方をしない。むげに断らずに、レポートがあるからなどと気を使った言い方で断わる。
- ③英語使用時の工夫：英和辞典を持って話す。英語でいいかどうか、人によって配慮する。なるべくわかりやすい表現を工夫する。電話の留守録に、英語でも吹き込んでおいた。誤解しないように、電話よりなるべく会って話す。
- ④日本語使用に関する工夫：日本語で一生涯懸命聞いてきたら、こちらも日本語で返す。窓口などで必要な日本語を練習してから、実行させる。日本語でどう言ったらいいのかわかると質問してもらうようにする。時間をとって、言い方の練習をする。日本語が上手になったと言ってあげる。次第に日本語を使うように心がける。1カ月で分かってきたなという感じで、2～3カ月でもう少し分かってきたので、レベルに合わせて使ってあげる。慣れてきた頃には日本語会話の実験台になる。覚えた文章で聞いてくる彼らを受け入れてあげる。文法の質問は、答えるのが難しいので努力がいる。
- ⑤文化の仲介：先生へのおみやげを何にするか、などの相談にのってあげる。先生に最初に会うときの言い回しを教えてあげる。電話のかけ方や、話し方の要領を教える。食べ物に慣れようとしているので、いろいろと教えてあげる。

- ⑥話題：冗談好きの人とは冗談を言い合う。日本人からありがちなワンパタンの質問をしない。女性は食べものや料理に興味があるのでその話をする。
- ⑦交流の心得：にこにこしているようにする。感情ははっきり示す。はっきり言う。理解に至るまでが大変だが、いいトレーニングだと考える。自分を見直すチャンスととらえる。出身地域による癖や傾向をつかんで対処する。辛抱強く話す。一緒に食事をする機会をつくる。約束を必ず守る。特に時間の約束を守る。口約束をしない。やると口に出したことはやる。遠慮しないで聞かないと進歩しない。いい関係を保ちたいから質問している、と理解してもらおう。相手の身になって考える。思いやりを大事にする。互いの理解しようとする気持ちが大事。相手が分からないと思ったら話は進まない。より知ることによって関係がスムーズになる。
- ⑧連絡：電話が使えない場合の連絡方法を確立しておく（院生控え室のボックスなど）。自分の授業の予定とかを話しておく。連絡のとりかたをきちんと打ち合わせておく。人を介して連絡する方法も教えておく。
- ⑨紹介：専門の近い人を紹介して喜ばれた。好意で手伝ってくれる日本人の友人がいて助かった。
9. 留学生とつきあう上で難しかったこと、やりにくかったこと、問題だったこと、誤解が生じたこと
- ①文化差：文化の違いを許せない人があるので難しい。食事にいっても、本を出して読み出す人もいるので戸惑う。こちらは自分の意見がないから、聞かれても答えられない。自分と違う日本人のスタンドを教えるのは難しい。譲歩することは難しい。分からないことがあれば、国ではどうなのかとか後でも聞くようにする。靴を脱ぐ国とそうでない国など、いろいろあることを理解する。いろいろな国の習慣をよく知ること。みんな国によって違うと気がつくこと。その人によっても違うということを理解する。どこまでわがままとみるかが難しい(家探して無理な要求をしたりする)。理屈も筋道も通っていることを言うので、反論が難しい。ものをはっきり言わない国もあると分かっていないと、困ることもある。誤解があったときには、確認しないといけない。留学生が国同士ではりあう意識を持つ場合もある。
- ②経済：留学生はレジャー資金が潤沢でついていけない。買うのを勧めても高いと言って買わない。
- ③年齢：留学生の年齢が自分より上すぎる。こちらが年下なので頼られない。
- ④関与の程度：指図されるのが嫌いな人のようで、指示すると怒られることがある。どこまで踏み込むのが難しい。親切をおせっかいと受け取られた。もっと仕事をしてくれといわれた。自分はバイトで忙しいのに、相手は暇を持って余しており、かまってくれと言われて困った。向こうは地理が分からず自分の車をあてにされた。時間がないので断らなければならないことがある。悩みや困ったことは言いに来ないようだった。



いつのまにか自力で解決していたこともある。日本人とは表面的つきあいだけだと言う人もいる。寂しがりやの人2人から会ってくれと言われて話し相手になった。聞いてはいけないことの判断が難しい。

⑤制度の問題：留学生の寮だけが隔離されていて、自然につき合えない。必須の言葉や店や手続きの情報が足りない。数が多くて大変だったのでもっと少数を担当したい。

⑥言葉・伝達：英語では言いたいことの一部しか言えない。英語では意味がはずれて伝わってしまう。医療の英単語が分からない。市役所や銀行などでは必要な言葉がなかなか出てこない。書類の書き方を誤解された。集合時間が伝わっていなかった。誤解があるときは英語ではちゃんと伝わらない。社交辞令を真に受ける。なぐさめてあげたいときがあったが、日本人ならどうやるか分かるのに分からなかった。ほめるのや喜ぶのはいいけれど、悲しいことのあった場合の表現は難しい。困ったり落ち込んだりしているときの言葉かけが分からない。いいことがあっても、良かったねとかだけの単純な言葉では、物足りないと思われることがある。英語で答えを言えないと他のチューターを頼りに行っていた。下手でも英語をしゃべる工夫をすれば頼られるが、一般には英語力と頼られ方は関係があるようだ。本当に必要で困るからだろうが、通訳として求められる。向こうに言葉が多ければ何か衝突があったかもしれないが、あまりにもやりとりが少なくてなにもない。こちらの英語がへたなことが分かっているためか、反応が少ない。分かっているのかいないのか、自分の会話に不満があるのかななどを、表現してくれないので分からなかった。わかっているのかと聞いたら失礼かと思って、反応がないままことを運んだ。日本語を勉強するのに、勉強の仕方を知らない感じだった。「話したいのに話せない」と言うばかりで、日本語の環境を利用せずに閉じ込もっている。日本については質問してくるのでしゃべらされるが、こちらの聞くことにはあまり返事が返らない。

⑦便宜的な問題：自分もこの土地に来たばかりで、安売り店などを知らなかった。車がないと行けない店があって、自分にはアレンジできなかった。

## 10. 考え方、やり方、習慣の違い

①経済感覚：買い物に行ったら高いの一点張りだった。お金に関係した価値観が違う。必要なものは買わないといけなのだが、高さにショックを受けて買ってくれない。安い店かどうかなど、何度も確認をする。少しずつ引き出すのだが結局使うから、銀行に何度も両替に行くことになる。電気製品は便利だが、高価だから購入を勧めにくい。かなりの労力を使って無料のものを探しまくる。標準価格のもので仕方がないと最初は納得してほしい。安いところを探してやらないと、なかなか買おうとしない。人参一本の値段も控えて比較する人がある。カセットやオーディオなどの電気製品を欲しがる。買い控えるので一度に買い物ができない。安くないと納得しない。物のない状態の暮らし方が、こちらには分からないと思った。店に行けば物が手に入るのを

- 当然、と思っていた自分に気が付いた。物があってお金があると社会がどう動くか分かった、と言われたが自分はむこうの国に行かないと、物のなさはわからないだろう。
- ②時間感覚：待ち合わせがきちんとなくて、みんなで集まるのに困る。遅れる人もいるけれど、おいていっていいのか待つのか、わからない。集団の集合時間は、遅れを見込んで早めにしたほうがいい。時間は、みんなに最初にきちんと伝達する必要がある。
  - ③思いこみ・常識：セルフサービスの意味がわかっていなかった。タクシーを拾うのが簡単と思っていた。集合住宅の騒音を気軽な感覚でとらえていた。指導教官に過剰に期待していた。日本語ができなくてもバイトがあると思っているが、非常に限られるのが現状だ。
  - ④習慣：少々の用でもすぐドアを開けてどうぞという国がある。さる国の人たちの間では、物の貸し借り場面を多くみた。義務ではなく当然という感じで、助け合いの精神を発揮している。家族の写真をいつも持っていて、見せてくれて、ほめると喜ぶ。宗教にまつわることではいろいろな差を感じる。日本人なら、家族と別れて寂しいことなどを、あまり大問題として言いたてないだろう。
  - ⑤なし：そこまでつきあいがないので、なし。あまり生活レベルでのつきあいがないので、感じなかった。

#### 11. チューター制度をよくする提言

- ①仕事の説明：仕事の内容を知らせてほしい。始めの手続き以外は漠然としている。制度として曖昧すぎる。手順を明確にしてほしい。やったことのない人には、情報をあげるようにするとよい。留学生にチューターの存在を明確に説明する必要がある。
- ②仕事量：チューターによっては何もしていない。自分はよく一緒に遊んでいるので、それとともにいろいろやれる。つきそいなどはもっとかりだしてくれてもいい。日本人は自主生に乏しいので、もっと言われればもっとやる。ボランティア的なので、強制してもいまいかないだろうけれど、もっと指示があったほうがいい。他の留学生が手伝ってくれたので助かった。
- ③人選：チューターをする人次第だから、興味のある人を取り込むといい。もっと日本人の側が外国に興味を持てばいいのだが。
- ④組み合わせ：留学生を助きたい人といっても、英語を使いたい人が多いようだ。相手の国によって不人気だったり、肌の色で拒絶反応をおこす場合もあるようだ。
- ⑤チューター制度：チューターの決定を早めて、もっと早く任命してほしい。日本語ができる留学生なら、一人に多くの留学生を担当させてもいい。日本語のできない留学生を複数担当するのは大変だし、十分なことができない可能性があるから、担当する人数を減らしてほしい。チューターをやる人を増やしてほしい。感想やできごとの記録をとっておき、説明してから募集するといい。ただやってみないかと言われただけ

だったので、大変さ・メリット・すべきことなどが伝わらない。中身が伝わらないので、面倒くさいと思われるだけだが、伝われば面白いと思う人もいるだろう。半年単位の任命では細切れなので、もっと長くしたほうがいい。引き継ぎの機会がないので、経験が生かされにくい。チューター学生用のガイドがいる。チューターにも受け入れ前の書類をみせておく。チューターを公募制にして受け付け名簿を作り、上から留学生を割り当てる。張り紙でチューターを募集する。チューターの仕事を明確にして、期間と内容と負担を明らかにする。院生控え室とかにチューター公募情報を置く。いろいろな学部の人にチューターになってもらう。チューターを登録制にして予備群を作っておく。チューターの経験者と未経験者を混ぜて任命するようにする。チューターを経験した人は集まって、次をやる人もやらない人も、最後の反省会をして記録を作る。チューター経験者の名簿があれば、アドバイスを求められる。チューターと留学生と顔合わせをするといい。顔合わせの機会がないと、みんなバラバラのまま、担当者やリーダーや他の人たちのことがわからない。後で行事つきそいなどで一緒に行く場合もあるから、留学生は他のチューターも知っておくほうがよい。チューター集団がいることを知らせる。来日後一週間は、チューターには予定を開けておいてもらうようにする。開始前に1回か2回集まり、書類書きの実習をする。

⑥他の制度：買い物リストを用意しておくとい。 「サバイバル日本語」の簡単なのを準備し、そこから必要なのをピックアップする。単語表や身の回りの漢字一覧も用意する。まわった不動産屋のリストを用意する。チューターの知らないこともあるので、買い物するところや交通機関や、土日の食事場所などの情報をまとめておく。来日直後の一日目や二日目にするなどなどの予定をまとめた表をつくる。緊急事態のマニュアルを作る。留学生が聞きたいことを聞くとか、調べることができるコーナーがあるとい。各学部の人や学生を呼んだりして、聞きたいことを聞けるようにする（院入試のこととか）。専門用語がわかる同じ学部の人と話す機会があるとい。近くに住めば自然な交流ができるので、一緒に寮に住みたい。生活圏が一緒だとなんでも言いやすいから、留学生を隔離しておかないほうがいい。摩擦があっても始終ふれあっていれば話し合えるので、外国人を分けないほうがいい。健康診断の問診表などは、当日書くより前もってもらって準備しておくほうがよい。

⑦指導方法：日本で面倒見る以上は、日本の 방식을尊重してくれと言っておいていいのではないか。言葉は学ぶが文化はいらぬという学生がいるけれど、それは違うという認識をもってほしい。文化を含めて学ぶように、チューターも仕向けたほうがいい。留学生同士も、もっと連絡を取り合ってほしい。

## 12. 次のチューターへのアドバイス

①文化差：国によってやり方が違うので相手によって対応を考える。さる地域の人とはことん世話をする覚悟でやる。さる地域の人とは、世話をし過ぎると迷惑があるのでべつ

たりしない。さる地域の人には、本音をびしびし言う方が仲良くなれる。さる地域の人は、日本人感覚が通じる。一緒に楽しく遊びたいなら、さる地域の人がいい。世話をあげたければ、さる地域の人がいい。さる国の人には、芋づる感覚で友達が増える。さる地域の人には、勉強中心。さる地域の人には日本語だが、他は英語で言葉が返りがち。さる地域の人には、気の使い方とかが自分達と似ており、頼んだら悪いとか分かるので遠慮するし、共感できるところがある。さる地域とさる地域の人には、共感するのが難しい。日本人よりつきあいやすかった。国で抑圧されていたために、やたらと異性にアプローチしたがる人がいた。自分も含めてアジアの国同士だと共感した。

- ②個人差：いろいろな人がいる。勉強意欲と自立心がある人は巣立っていき、離れていく。留学の動機の問題があり、お金儲けの人はダメだが、本気で勉強する人は別だと感じた。留学生がよくしゃべる人だと助かる。年上なら特に、教えてやるというのは無理。あうあわないは外国人だからだけではなく、やはり人どうしは相性がいいのもあわないのもいる。外国人だからといって人の差はなくなる。
- ③積極性：これを機会に、外国人と片言の日本語・英語で話してみる気になるとよい。学校で留学生とすれ違っても、関係のない人だと話す機会もないから、彼らを避けがちになる。他の外国人を紹介してもらおうといい。日本人は国際交流と構えすぎる。
- ④体験の勧め：やっているうちにやり方が分かる。自分でやってみないとわからない。
- ⑤相方向性：受け身になって相手を理解しよう考えると同時に、自分のことを理解してもらおうとしたほうがいい。相互性がないと意志の疎通ができない。互いの助け合いが大事。コミュニケーションをよくとること。
- ⑥親密性：仲良くすること。いつでも相談できるようにしておくこと。構えて話題を用意するのはよくなくて、雑談からおのずとわく話がいい。親しければ違いを楽しめる。何でも話せる関係があつて始めて困ったことが言えるのであつて、困ったことだけ聞き出せない。
- ⑦興味・好意：外国に興味を持ってほしい。外国人を好きになってほしい。外国人は面白い。外国の人に本当に興味を持っていないといけない。相手の国のことを知りたい気持ちのあるなしでだいぶ違うし、それがないと会話が続かないだろう。
- ⑧動機・意義：他国を知る動機があると本当に面白い。知らない国のことを知るのが好きという動機の、大きい人がある。他国の人を知りたいという人以外がすると、迷惑ではないか。世話好きの人がなったらいい。お金を動機にするのではないほうがいい。勉強にはなるかなと思ったが本当に勉強になった。自分の問題意識も高まって、本当に勉強になった。誰かに何かして喜んでもらえたら自分の心を満たすかもしれないと思った。理屈でない心の収穫があつた。相手から何を学ぶかが問題だという意識を持つ。期待した10から20倍は返ってきた。ボランティアでしてあげるのではなく、こちらからも楽しむべき。自分の外国滞在体験から彼らの困難が理解できるので、助けてあげ

ようと思った。助けてあげたい気持ちがなければ、面倒なだけだろう。自分の専攻に照らして学ぶものがあると思った。してあげる気持ちがないとできない。ここは田舎なので自分も孤独になる。してあげようという気持ちがないと、結局やらないことになる。不便だろうと思うと、やってあげてもいいかという気持ちになる。自分にとって何でもないことも、不思議に思えるんだということが分かって視野が広がった。一般に、男性のチューターは面倒みが今一つではないか。

- ⑨面白さ：自分には面白かった。一緒に酒を飲んだりすると陽気で楽しい。チューターは楽しいからがんばって。
- ⑩心配：自分も最初はできるかなと気が重かった。知らない人だし何を話していいかと案じた。話題の持っていく方とかが、不得意だった。心配したけど、やってみたら向こうの英語は以外と分かる。半年だからか、それほど摩擦を感じていない。
- ⑪実用上のアドバイス：連絡がとりにくいので、その方法をはっきりさせる。パンフレットを作る。最初一週間くらいは、何が飛び込んでくるか分からないので、できるだけ都合をつけておく。自分のこと優先の人もいるが、最初は手間がかかると覚悟した方がいい。最初の一週間はつきあうようにし、だめなら代理を立てる。最初のころは、1日空けてしまうと大変。最初二日を担当する人は、買い物や手続きや乗り物を手配する必要がある。何日かかるとか、何をしたなど、記録をとっておくと、後の人の役に立つ。初めての人と経験者と、話す機会が欲しい。経験者に相談できるシステムとかがあるといい。そのときに担当している人たちだけでやろうとしなくても、応援してもらえばいいのではないか。不動産屋はところにより態度が違うので、いいところの情報をもっておく。留学生にはチューターのことを説明する。先輩のネットワークのある人は、わりと心配いらぬ。交換室とか研究室の誰かが電話に出る先生にける場合は、英語ではだめ。チューター二人と留学生も二人という組み合わせが、以外と楽。高い買い物にためらったら、ボーナスシーズンは安くなるからと購入計画を立てさせる。傘など必要な物をリストアップしておき、いつ買うかを本人に判断させておく。買い物に行く前に買う物を決めさせておく。最初必要なお金の目安と物のリストを用意する。必需品だけ買ってもらっておいて、後はバザーとかを待ってもらいたいだろう。

## < 考 察 >

チューター体験を振り返った全体の答えを通じて、いくつか目だったものを以下にまとめてみる。

1. 日本語の未習熟者に対する補助役としてのチューターの実用的意味が大きい：日本語力が皆無で来日する場合に、特に必要性が顕著である。読み書きも対話もできなければ、

手続きも買い物も、交通機関の使い方を見いだすこともできず、日本生活において、はなはだ無力となる。全ての初期の必須手続きに、チューターが必要になる。

2. チューターの苦勞の一つは、自分も初体験の現象を、情報不足、システム未整備、コミュニケーション障害の中で行うことである：来日当初は全面的に頼られ、時間のやりくりもつきにくく、不測の事態にも振りまわされる。気持ちの準備ができないままにこうした状況に巻き込まれた場合は、特に大変な思いをしている。
3. レジャーや交友で楽しい体験をしている：パーティーをよく開いたり、遊ぶのが上手な文化からの留学生であれば特に、楽しいことも多い。自分の持つ日本人のネットワークに入れてあげるといふより、留学生のネットワークに入れてもらう特別の日本人というパターンが多い。日本で遊びたい希望を持つ留学生の外出につきあうことや、趣味を同じくする人とその活動を共にするなどの普遍的な楽しみ方もある。レクリエーションを通じた一体感、高揚感は記憶に残り、学生時代の思い出の一つとなっている。
4. チューターは文化の仲介機能を果たしている：日本文化の解説や、留学生の抵抗感を和らげるような配慮をした段階的な導入の工夫、トラブルや連絡の仲介など、留学生に対する異文化間インターメディエーター（田中・松尾、1993）の役割を果たしている。そして留学生の方も、日本人学生に対する自国文化への紹介・導入役として機能している。
5. 関係を通じて文化の学習が行われている：社会的知識、語学的知識を含めて、異文化に関する生きた実例を通じた学習が成立している。そして誤解やトラブルからは、それぞれの文化の持つ慣習への配慮も学んでいる。
6. 異文化接触の仕方の基本を学ぶ機会を提供している：日本人学生にとっては、いやおうなく対話し、仕事をこなさなければならない相手である。関係の開始も修復も、調整や交渉も、目の前の具体的な事例に対して自分自身で行わなければならない。そして異質な相手との交流、いわゆる異文化間のコミュニケーションの仕方というものを、学んでいる。例えば異質さを認めた上で、同質さを的確に把握し、良いところを見いだしたり、異質さを刺激として楽しんだり、違いを尊重しあうことで互いを大事にするなどの姿勢を見つけたと述べている。これらはスキルの実施に先立つ認知的再体制化（田中・藤原、1992）となり、行動次元の技能発揮のための、認知的な準備体制を整えている。
7. ソーシャル・スキルの各論の実習機会を提供している：例えば異文化間ソーシャル・スキルの中では、主張性は重要なものの一つである。国際社会において、自分の意見をきちんと言えることは習得が必至の行為であろう。相手との意見のそごを、どう歩み寄り解決するかという、きわめて重要な課題のひな型として、今回の異文化接触事態をながめることができる。誤解をとりまとめたり、対話から解決の方向を見いだしたりする、といった体験もつんでいる。国際交流と銘うって行われる、例えば踊りを見たりするような文化交流行事では、こうした食い違いについての学習機会を得ることは難しい。異

文化接触の実用的な問題解決の側面にふれる機会として、貴重な場であろう。

8. 日本社会や自分自身を振り返る機会になっている：日本の文化や近代文明を、客観的に見直す機会となり、視野の広がりをもたらしている。自分の意見を求められたりすることから、自分のものの見方や考えかたを整理していったり、相手の人間的な深みにふれることで収穫を得たりしている。
9. チューター体験の成果は、モチベーションとパーソナリティーに影響される：学びたい動機があれば、学習の機会は行かされる可能性が高い。仕事として割り当てられただけでは、何を学びたいのか不明瞭にもなる。また、世話好きの人が奉仕の側面にうまく呼応したり、ボランティア的関心が満たされたりする面もある。ふさわしい興味や関心の持ち主を任命して欲しいという声は、システムを生かすための大切な指摘であろう。また担当留学生との相性、留学生の側の日本人との学習意欲、日本語学習意欲、日本留学動機なども、関係の質を左右している。対人関係である以上、互いのパーソナリティーは、外国人だからといって無視できる要因ではないという指摘もあった。
10. システムの整備を希望する声大きい：学内におけるシステムの整備に関しては、建設的意見が多く寄せられた。そのうちのいくつかは、一部の部局では実施されている。しかし、担当セクションや協力体制が明確でなければ、実現までの手続きも定まらず、こうした試みが発展することは難しいであろう。教育の機会なのか、福祉的な制度なのか、性格づけが定まっているとは思われない点も問題であろう。

以上を眺めると、チューター体験に少なからぬ意義を認めることができよう。留学生とあまり接触しなかったり、関係が深まらなかったりした例もあるが、かなりの意義深い体験も認められる。現象として以上は包括的にとらえたものだが、個々の研究テーマとして着眼できる各論については、以下のように考えられよう。

まず、ソーシャル・サポートに関しては、各種のサポートの授受が確認された。日本人学生側も提供側になるのみならず、留学生との対人関係の進展にともなって、サポートを受けている。対人関係の深まりがみられない場合は、表面的な手続きの代行や補助に終始する。労力の提供に関わるサポートも目だつ。

ソーシャル・スキルに関しては、まず異文化性への知識と理解、異文化性への配慮を伴った判断と行動が、当該の文化に即して求められている。これは「文化特定スキル」に該当する。そして異質な者との交流一般に必要な要素として、対話の重要さや、否定的な帰属に短絡しない注意など、いうなれば「異文化接触一般スキル」があげられている。さらに、より一般的な、文化に特定されない、対人関係構築の際のいわゆる「文化一般スキル」も少々見られる。今回の調査対象者である日本人学生は、学校生活では普通に対人関係を構築している人々と思われる。積極性もあって、チューターを引き受けたのであろうから、一般的な対人スキルは標準的な要求水準を満たしていると推測される。この人たちへの学習機会を提供するとすれば、やはり付加的に補う必要がある「文化特定スキル」、および異

文化接触の初心者であれば「異文化接触一般スキル」であろう。これらを、心理教育的なプログラム構成（井上・田中・鈴木、1996）の対象に取り入れていくことが必要であろう。

成長に関しては、外国の現実について、実感を伴って知ったことからくる視野の広がり、多様な価値観を持った、人間的に興味深い人たちとの邂逅を通じての内的成長が、まず認められる。日本社会を見直す価値観の転換、交流や学習への動機づけの高まりもある。援助対象としての留学生のとらえかたや、ボランティア活動としての意義の発見と同時に、対人関係が双方向性になった場合はそれに留まらない対等な人間関係ができ、そこから学ぶという意識がある。

総じて、成長の次元には、3つあるように見受けられる。一つは、社会的な側面での学習効果である。外国の生活事情や価値観を知ること、視野の広がりもたらされる。日本の何気ない習慣や当たり前と思っただけの社会の仕組みを、留学生の視点との同一化を取り入れることで問い直している。「物にあふれた日本社会」のありさまに気づき、「日本人とつきあうより面白い」といった刺激を得ている。そして交友半径の広がりから、ますます広い知識を得ることができるようになっている。社会性の高まり、社会的知識の広まりなどが認められる。

二つめには、異文化間心理学的な気づきとコンピテンスの向上を得たことである。体験を通じての自発的な学習の成果として、異文化接触に伴う知識面、情緒面、行動面の現象や対処方法を、総合的に学んでいる。習慣の違いを、具体的に個別の実例として知るの、知識の側面といえる。気後れしないとか、勇気を出すなどの情緒的な部分のコントロール、興味を抱いて高揚したり、意欲を持つといった側面、異質さへの不快感や怒りの低減、予定通り行かないことのいらだちへの耐性などが、情緒面である。個別のスキルを知り、社会的文脈において正しく受信し、また発信するのが行動面である。異文化間教育的な効果をより引き出すためには、何らかの形で適切な指導が行われると効果的であろう。

三つめには、青年期における人間的、人格的な成長の側面である。寛容さを得たり、思いやりの大切さを感じたり、勇気や積極性を身につけたり、学ぶ意欲を向上させたりしている。また計画や実行や準備といった事態へのオーガナイズを学んだり、現事態において何が必要かを自ら考え出したりするといった、有能性の向上も認められる。

チューター体験は、日本人学生にとっても、興味深い成長と学習の機会となる可能性があり、きわめて意義深い心理的・教育的体験であると思われる。そして異文化接触の力動を見いだす場としても、それによる変化を見いだす場としても、貴重な機会であるように思われる。

## 引用文献

ヒックス, J. E.・有馬道久 1992 留学生の異文化適応 山本多喜司・ワップナー, S. (編) 人



生移行の発達心理学 北大路書房

- 井上孝代・田中共子・鈴木康明 1996 留学生と日本人学生に対する心理教育的グループセッションの試み 日本カウンセリング学会第29回大会発表論文集（印刷中）
- 高井次郎・田中共子 1993 日本人学生の社会的行動－留学生のための日本的ソーシャル・スキル指導へ向けての予備調査－ 教育学研究紀要39(1)、340-346
- 田中共子・藤原武弘 1992 在日留学生の対人行動上の困難－異文化適応を促進するための日本のソーシャル・スキルの検討－ 社会心理学研究、7(2)、92-101
- 田中共子・松尾馨 1993 異文化欲求不満における反応類型と事例分析－異文化間インターメディアーターの役割への示唆－ 広島大学留学生センター紀要4、81-100
- Tomoko Tanaka, Jiro Takai, Takaya Kohyama, Hirofumi Minami and Takehiro Fujihara 1994 Social Networks of International Students in Japan: Perceived Social Support and Relationship Satisfaction. The Japanese Journal of Experimental Social Psychology, 34(1), 1-11
- Yashima, Tomoko and Viswat, Linda 1991, "A study of Japanese High School Students' Intercultural Experience --'It's not a dream country, but I love America.' Change in Image of Americans", Human Communication Studies, 19, 181-194